

印伝を応用した点字・触地図

a2201028 矢吹安里紗

研究概要

伝統工芸・印伝を点字、および触地図の表現技法として応用する研究。
その研究の成果を用い会津若松駅の構内案内図を製作した。

背景・目的

私は漆の新しい表現の可能性を求め、印伝に着目した。印伝とは「印傳革」の略であり、鹿革に漆をつけて加工した日本の伝統工芸品である。日本において印伝の歴史は古く、正倉院 宝庫内に見られる印伝の足袋が最古のものである。文献においても奈良時代の日本書紀から江戸時代の東海道中膝栗毛にまで印伝の記述が見受けられる。そのように古い歴史を持ちながら今も新たな発展を続けている印伝ならばより一層の可能性が見出されるのではと考えた。漆芸というと器物のイメージが一般的だがこのように多様な漆工芸品があるということを広く知ってもらいたいと思った。

印伝をテーマとするにあたりまず甲州印伝をの生産地を訪問し素材、技法について調査した。その上で研究対象を検討し、その中で印伝独特の漆の突起を点字に応用できるのではという発想に至り研究目的に設定した。

私たちの目にする公共物についている点字というとプラスチック製や金属製がほとんどで、無機質な印象を受ける。そこで漆を点字として活用すれば点字の新たな素材になるとともに、地場産業である会津塗りも合わせてアピールできることも含めて、漆の可能性も広げることに繋がるのではと考えた。

対象

対象は点字利用者を主とし、駅を利用する会津若松市民、および観光客が対象。

点字を利用する人に限らず、健常者も駅を利用する際に案内板として十分役割を果たすデザインとする。

デザインコンセプト

色は漆の代表的な色である黒を基調とした。メインとなる地図の部分には金箔を貼りその上に梨子地を塗り重ねることで彩度を落とし、落ち着いた画面になるよう心がけた。

地図は一目見て場所が把握できるように極力シンプルなデザインにするよう心がけた。

点字に関しては画面が込みごみしないよう要所は記号で表記し、詳細を下スペースに表記するようにした。その他の事項についても読み取りやすさを意識し構成した。また健常者も見て楽しめるよう、点字や図面は色漆を用いて描いた。

制作工程

1. プレーートの制作

切り出し

摺り漆

蒔き地

粉固め

錆付け

下塗り

追い錆

中塗り

上塗り

2. 地図を描く

金箔を貼る

図柄を描く

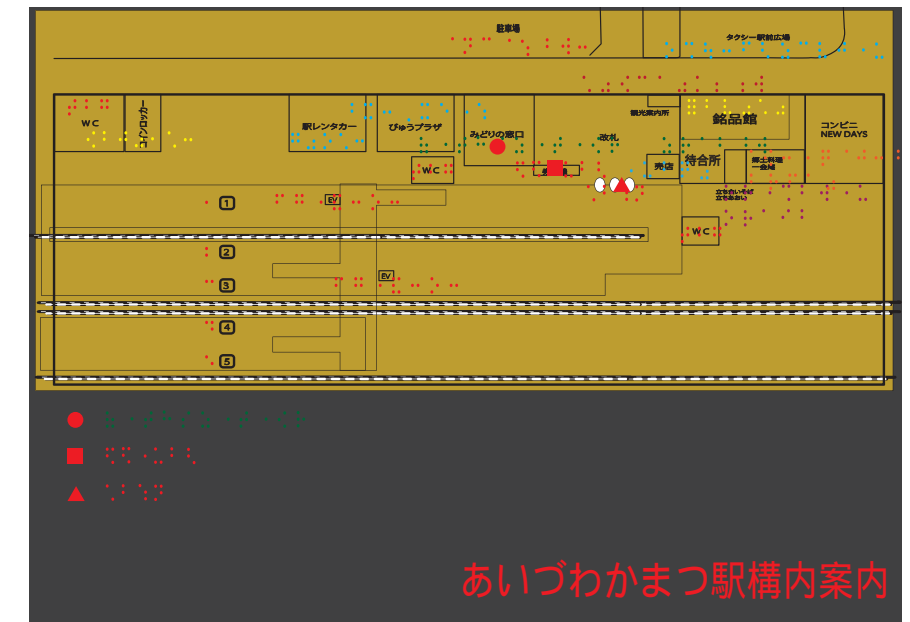
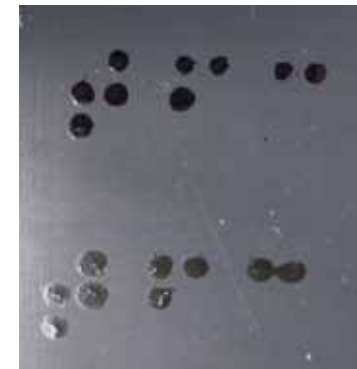
梨子地漆塗り

印伝用漆で枠を描く

点字を打つ



甲州印伝を調査した際の様子



案内図デザイン

考察・感想

点字としての表現をするにあたり定められている規格に倣って表現するのが難しかった。視覚障害者の中にも点字を利用する初心者や網膜症の方と熟練した方とでは点字の感じ方も違ってくるといふ。前者は突起が高いほうがよいこともあるが、一般的には刺激が強すぎるのだそう。その差異も0.1mm程度の高低差で読みにくさが変わってくるとのことだった。点の大きさが均一になるよう点を打つのが難しかった。漆も高く盛りすぎると乾かず、縮みという現象が起こってしまう。少しの高低の加減がつけづらくうまく表現できるようになるまでは時間がかかった。

人が多く触れる公共物での漆器は少なく、そういった面でも新しい試みになったと思う。ただ、駅に設置してある公共物はいたずらの被害に遭うことが多いという。その点で引っかくなどの強い衝撃への対処など長期に渡って公共の場に展示するにあたってはまだ課題が多いように感じた。漆を学んできてこうした公共の場に出すことを前提として作品を制作するのは新鮮な経験だった。点字という普段あまり触れる機会の少ない分野にも接することができたというのはとても興味深かった。今後の展開として観光案内図や各所の情報版などにも応用が可能ではないかと思われる。